

し、この新機械を一舉百台飯沼地方に購入し、本郡機業界に一紀元を作る事になった。

この期の後半は電化による力織機と飯沼附近の足踏機の使用によつて、生産能率は従来に比して五割以上も増加した時代であつて、いはゞ織機改良時代とも稱すべく、爲に郡下の有数産業の一つに数へられる様になった。かくては寧ろ原料の不足さへ感ぜられはしなかつたかと思はれるが、養蠶界の長足なる進歩は未だこの懸念を與へなかつたのである。

第四期 賣品業者の自滅と賃織恐慌時代

(世界大戦後より大正末年頃まで)

世界大戦の齎した未曾有の好況により物價は昂騰し、本郡機業界も異狀的發展を示し他のすべての産業と共に好景氣の絶頂に達した。特に業者の急激な増加と織機改良に伴ふ生産能率の増進により、次第に地方的原料のみを以てしては不足を告ぐるに至つた。此處に於て原料不足の打開策として郡外進出の機運動き、松下莊藏氏・武村嘉吉氏等現下伊那機業組合幹部等を網羅して下伊那機業同盟會を組織し、松下武村兩氏等は組合より選ばれて木曾・松本・中津方面に視察旅行を試み郡外發展の餘地大なるを確めて歸郷した。但し當時一般業者は未だ消極的態度を持し、僅かに少數有志の發展を見たるに過ぎなかつた。之即ち大正十年前後である。

又この好況に刺激せられて賣品製造の機運が再び擡頭した。喬木村西川五郎氏(故平野氏 議士令弟)は錦紗縮緬を京都市柴田商店に移出して本場優良品に遜色なしとの折紙を附せられ、當時氏が組合長たりし關係上同業者に賣品製造を奨励し、又氏自らも會社組織に改めて大いに發展せんと企圖したが、漸く財界の不況に傾くや遂に挫折した。此の頃電丘村の清水代三郎氏は織機數台を購入し、鼎村には伊那絹縮紡績株式會社が設立せられ、松下莊藏氏の指導により小西吉民氏を監督として

織機部を設け、織機二十台を購入し、其他飯田町の小栗豊太郎氏、上飯田町の林榮氏及び高坂正夫氏等は轡を並べて力織機を購入して事業に着手したが、既に恐慌時代に入つた爲に切角の賣品製造も頓挫の止むなきに至つた。即ち西川氏は先づ倒れ、伊那絹縮社は未だ賣品に着手しなかつた爲に價暴落による損失を免れたが、會社の一般的營業不振の爲にもなく倒れた。その他高坂正夫氏(野原文四郎氏令弟)外二三の賣品業者も賃織に還元する有様となつた。但し清水氏は相當の打撃をうけながら獨りよくこの難關を切抜け、その古濱縮緬を京都市吉村商店に移出し、その品質優秀なるを認められ、爾來昭和七年頃迄繼續し、よく賣品の孤城を死守したるは偉とすべきである。

斯様に明治卅年前後にしても大戦後にしても賣品業者は全く同様の經路を辿つて失敗して居るけれども、それ等人士の多くは有識階級に屬し、斯業經營に對する研究心と熱意とを有せし爲、それ自身の失敗はともかく、郡下機業界に與へた有形無形の影響と功績を輕視してはならない。

斯様に賣品業者が何れも殆んど致命的創痍に苦んで居た時、賃織業者は初め恰も對岸の火災視して餘り關心をもたなかつた。事實まだこの頃は前期來の好況の影響をうけて賃織は悲觀するに至らず、全國的機業の不況の中にあつて安全地帯たるかの感があつた。然るに業者は次第に増加し、機械の完備による生産能率の増進等による生産過剰と、漸く深刻化する不況とにより、業者漸く悲境に悩むに至つた。特に本郡機業の核心地上郷村が、大正十二年遂に電化した爲に生産能率は倍化し、一層この情勢を強める事となつた。

この悲境を如何にして乗切るか問題となりながら、業者間の連絡統一を缺き、内紛抗争行はれ、悲觀と沈滞の氣分滿ち、中には他業に轉出するものさへ現れるに至つた。大正末年より昭和の初年にかけて此の情勢はその極に達した。特に生産過剰の爲業者間の賃賃低下の競争激化を來し、その停止するを知らざる有様に陥り、自縛自縛の形となつた。そこで機業組合ではこの狀勢を察し、幾度か協定賃金の値下を斷行し、反則者所罰等の問題で屢々紛糾した。併し當時は顧客が

大部分が郡内であつた爲、その限られた顧客の争奪上協定賃金は忽ち崩れ、爲に組合の内紛抗争の絶えなかつたのも止むを得なかつた。

この頃先に組織せられた下伊那機業同盟會の事業は、飯田町織物査定場を中心とする機業家に委託し、その事務所を松下莊藏氏宅におき、松下莊藏氏・林榮氏・高坂正夫氏等を中心として活躍し、岐阜縣中津町附近より年數百反の取引をつた。これ即ち本郡機業が縣外發展をなしたる第一歩で、これに刺激せられて上郷村の鈴木徳太郎氏・武村嘉吉氏を中心とする上郷絹織物生産組合を設立を見たが間もなく中絶した。

第五期 賃織對外發展時代（昭和時代）

昭和年代に入つて財界は少しも立直らず、寧ろ深刻化し、本邦各地の賣品業者も特殊のものを除けば、殆んど利益を擧げる事が出来ない状態であつたから、本郡としても清水氏が孜孜として努力するの外、新に開始する者もなかつた。併し賃機は前時代の沈滞と行詰りの極を打開して新生命を開き、今日の如き盛況を迎へるに至つたのである。

この打開に當つて最も早く先鞭をつけ、而も多大の貢獻をなしたのは上飯田の若松屋林榮氏である。氏は長野師範學校卒業後初等教育に十年間盡したが、郡下の狀勢を顧みて機業の重要なを覺り、大正九年不況を前にして親戚知人の反對をおして敢然機業界に投じた異色の人である。始め附近の工場に入つて斯業を收得し、次いで丹後より縮緬職工を聘して小工場を設立し、古濱縮緬を製出して京都に出したが失敗し、大正十二年賃織に轉じたのである。機業界の行詰りのどん底昭和二年三月恰も奥丹後の大地震によつて、本邦機業界の王座地域がおびやかされ、本郡の織物が京都に進出する機縁が與へられた。此處に於て同年八月林氏は決然自ら京都に上り、親しく該地の實狀を視察した。當時京都は織物と共に染

物も全國に冠絶し、特に染物屋は通信取引によつて全國に賃織取引しつゝあり、又兩業を結ぶ周旋業者（悉皆屋）が多數存在し同様に顧客を取扱ふ組織となつて居た。林氏はこの巧なる經營組織の視察と共に、彼地が賃織技術の寧ろ拙なるを見て、下伊那の賃織の有望なるを觀破し、直ちに京都の知己染元中菅又市氏を介して全國に宣傳し、通信取引を開始した。

更に月餘を費して中國・四國・九州方面を仔細に視察し、益々その有望なるを確かめ、顧客の擴張に努めたのである。かくて顧客は次第に増加し、今や北は青森より南は鹿児島に至る内地諸府縣を通じて、廣く天下に原料を蒐集し、之を郡下賃織業者に支給した爲め、行詰れる賃織業界は數多の材料を得て活氣を呈するに至つた。昭和四五年頃よりこの間屋制度は漸く認められ、飯田織物共扱所（松下莊藏）、高木商店（服村、機業家）、清水代三郎氏、溝口商店（伊賀良村、機業）、同榮會（上郷村武村嘉吉氏外數名）、船澤織物工場（阿島）等を始めその他多數の間屋が出来、組織上多少の相違はあつたけれども、何れも廣く縣外發展を試みるに至つた。

斯様にして一時悲觀された本郡機業界もこの間屋による縣外進出によつて驚異的發展を示し、昭和三年には二萬九千點（三十萬圓）が昭和六年には六萬點（三十四萬五千圓）を突破し、機業者は百三十戸を越えて縣下第一位を示し、間屋數も昭和八年に於て三十餘を數へ經營形態に於ても全國類例なき特殊賃織形態を完成するに至つた。然るにこの間屋も互ひの統制を缺き、間屋間の無益の競争が展開され、争つて低賃銀を發表し際限なき賃銀低落を辿り、賃織業者も間屋も殺倒する注文を控えながら、早くも昭和七八年頃には、又しても苦境に喘ぐといふ珍現象を迎へる事になつた。

以上の如く現在に於ける本郡機業界の盛況は間屋に負ふ所甚大である。然るに間屋と機業者間の連絡統一は必ずしも上々ではない。否々歩調は亂れ勝ちである。特に機業界は大正十年頃より不況に伴ふ織賃値下となり、一方組合は協定によつて之を防止せんとし、個人的反則者と組合との間に屢々いざこざが繰返されて居る。時には反則者の嚴罰主義が主張さ